インタ 学長 ビュー ▶7◀

大学院重点化構想と総合科学部

本シリーズ七回目として、六月二十一日に大学院重点化構想と総合科学部との関係について、竹島広報委員が委員長とともにインタビューした。

学長は先日、総合科学部創設二十周年記念式典での式辞の中で、広大は今、土・日を返上して自然科学系大学院の改組に取り組んでおり、総合科学部もこの重点化の波に乗り遅れてはいけない、と言われましたが、今回のインタビューでは、この問題に関してお伺いします。

まず、大学院の整備計画についてですが、五領域構想は生きているのか、現在の整備計画は五領域構想の延長にあるのではないか。

―生きていると考えている。ただし、その中の総合系領域に関しては、その総合性の定義が問題である。狭い意味では、自然科学系の大学院への改組もインテグレイテッドのものであるし、広い意味での総合性とは何か十分に考える必要がある。特別委員会答申で総合系大学院構想が盛られなかった理由もそこにある。

プランが煮詰まったところから概算要求するというドミノ方式の整備方法に問題はないのか。

次に組織としての総合科学部の今後に関してですが、大学院重点化は総合科学部の解体につながる可能性はないのか。

―学部として、十分機能しているのだから、その可能性はない。大学院重点化を目指し、全教官が、それぞれの大学院に所属することになれば、分属の問題も回避されるし、分属した場合におこる、メイジャー、マイナーの問題も起こらないのかも知れない。

ただし、総合科学部の所属教官のネットの数は決まっているのであるから、一貫教育が進んでくると、停年退官の教官のポストを有効に活用することなどが考えられる。

総合科学部を二十年前に設置したという、大学改革の前衛としての自負と責任をどう思いますか。

―他の大学と比べて楽な状況にあるのだから、そのエネルギーを上のレベルの問題解決のために費やして欲しい。

次に教養的教育の今後に関してですが、特別委員会答申の問題点（外国語科目・情報関係科目）の解決が急がれる。教務委員会でのスケジュールは。

―外国語教育は実践的な授業を要望したい。私自身ドイツ語が好きで毎朝、ラジオでドイツ語放送を聞くほどだが、旅行ですぐ使えるからという理由で中国語の受講生が増えているというのも十分理解できる。韓国語が初修外国語として置かれていないのもおかしいとおもう。外国語に関しては前総合科学部長も懸念を表明しておられるが、早急に解決の糸口をみいだすよう教務委員会で努力していただきたい。

全学で教養的教育を担当するという確認は本当にとれているのか。前学長時代に制定された、いわゆる「大綱」を生かす具体的な方針が示されていないが。

―田中前学長の考えは、たとえば、教育、研究についての経験豊富な五十五才以上の教官を対象に、たとえば医学部の教官が文学部教養的教育の講義に行くとかして、ただし、一コマ全部ではなくて、そのうちの一、二回の講義を担当するというように。この考えは、わたしも賛成だし、単位の問題を含めて、もう一度教務委員会へ投げかけてみたい。

本日はどうもありがとうございました。

―私のほうから一つ。学長科研の問題だが、これまでは科研費がもらえなかった人に回すという方法がとられていたが、これを改めて重点配分を考えたい。

たとえば、学内の省エネの研究や、若手で、トピカルな仕事をしている人あるいは環境整備なども対象として考えている。そして、研究成果については、広く学内及び社会に発表していただきたい。